

石原 豊子 選

特 選

夜更けて本を静かにひらく我気づけばいつもまだ見ぬ世界

呉市立川尻中学校二年 西尾 倫

【評】静かな夜の読書。いつの間にか本の中に引き込まれている作者。そのことを「いつもまだ見ぬ世界」が表現していい。

藍色の母娘二代の浴衣着て涼しき風が袖を駈けゆく

県立三原高等学校一年 尾越 心美

【評】「藍色」の清々しいしかも「母娘二代の浴衣」の表現が良い。「涼しき風が袖を駈けゆく」に作者の喜びが表現されている。

過去偲ぶすきま風吹く祖父の家思い出詰まる空っぽの部屋

呉市立呉高等学校二年 小林 莉緒

【評】「すきま風吹く」「空っぽの部屋」の表現に生前の祖父との温かい思い出を感じさせる表現が良い。

ほしかった本を手に入れ開くとき未知の世界がそこに広がる

広島市立船越中学校二年 朝長 風羽

【評】「本を手に入れ開く時」に、作者の未知の世界への期待感、わくわく感が表現されていて良い。

雨上がり見上げた空に虹がでたきつとこれからいいことあるね

庄原市立東小学校六年 増永 紗也

【評】作者の気持ちの良く分かる歌。見上げた空に偶然に虹と出合った。それだけで何だかワクワク感が。いいことありそうなど。

気になった一冊抱え帰路につく心が躍る秋の夕暮れ

県立広島皆実高等学校三年 佐木 遙月

念願のセーラー服にそで通し心浮き立つ鏡見る朝

県立広島皆実高等学校一年 堀益 優渚

線香の匂い漂う墓地の中思い出される通夜の夜の祖母

県立三原高等学校一年 浅海 優

闇の海山からのぞく煙火は甲斐なく終わり香るさびしさ

福山暁の星女子中学校二年 栗原 千寛

マスク取る勇気があった一学期夏休み明けの不安がつのる

県立三原高等学校二年 向井 文音

双方の考え必ず揃わずに交わす議論はちよつと楽しい

呉工業高等専門学校三年 金満 二葉

ひいじいちゃんに僕の姿を見せに行く今も空から見ていてくれる

三次市立八次小学校六年 岩原 直希

夏に咲く幼き記憶思い出す特等席は母の肩車

県立尾道北高等学校一年 岡田レオナ

夕暮れに姉と比べた影法師いつになってもその丈抜かせず

呉工業高等専門学校三年 橋渡 空

逝く夏の静寂の空見上げ思う時よ私を置いてゆくなと

県立尾道北高等学校一年 藤井 梨那

こんにちば行き交う人のあいさつに元氣をもらった大山登山

庄原市立東小学校五年 岩崎 薫

いつの日か未来で過去を話すとき失敗もすべて笑えるように

県立廿日市西高等学校二年 井上ひより

千羽づる平和を願い折り進める悲惨な戦争起こさぬように

庄原市立東小学校六年 佐々木潤矢

目をつむり平和の鐘を耳にして思いを込める一分間

県立広島中央特別支援学校中部二年 濱田 美遙

道歩きふと見上げれば冬の木に輝く蕾一つみつけたり

県立尾道北高等学校一年 今村 綾希

授業中白光放つ壁を見て炎暑感じた昼の数瞬

県立尾道北高等学校一年 清野 優奈

海開き大きな気持ちで向う海焼ける足跡続く道筋

呉工業高等専門学校三年 柳生 大地

青空に蝉の声響く夏の朝風鈴揺れて涼しさを呼ぶ

県立尾道北高等学校一年 森石 颯真

桜島海に浮かぶ初日の出ここえる朝に光りあふれる

呉市立呉中央中学校二年 大王みさと

夜の海少し聞こえる波の音海にうつりて見える満月

広島国際学院中学校二年 根津 泰斗

石原 豊子 選

特 選

そびえ立つ高炉はもはや錆おりしされど誇るがに夕陽に染まる

呉市 中島 義夫

【評】「そびえ立つ高炉」はどこか。島根県の「たたら製鉄」と想像した。下の句に作者の高炉への思いが表現されているのが良い。

祖父の背に語られぬままの戦後史を原爆ドームは静かに見守る

広島市 箭田 儀一

【評】語られぬほどの強い衝撃を受けた祖父。その思いを想像できる作者の気持ち「原爆ドーム」と重なる結句が良い。

夕暮れのカフェに子らと笑みながら妻の余命はわれのみが知る

尾道市 川口 靖文

【評】上の句の温かさとの下の句の作者の苦しみの対比が鮮明である。子ら  
を思う気持ちと妻を思いやる心が痛々しい。

茜雲見上ぐ窓辺に小さな灯明日は手術日ひとり佇む

広島市 山田 雅子

【評】 作者は病室から見える茜雲。家々の小さな灯。それだけでも寂しさが漂うのに、明日は手術日。やるせない寂しさが伝わる。

モノトーンの長き時越え産まれくる初孫の青春に弾ける

庄原市 古家八千代

【評】 上の句の「モノトーンの長き時越え」の表現が素晴らしい。初孫の誕生を心待ちしていた気持ちが強くなった。

大戦の疎開者数多養いき厨の母の包丁の音

世羅郡世羅町 石原 恭子

母の日や墓の前にて語ることに八十路過ぎしも慣例となり

広島市 寺本 恵風

四年ぶりの峡のふるさと校舎より聞こえきし校歌に歩を止めて和す

尾道市 仲尾 修

朝の陽に大地が呼吸始めたり水蒸気白く畑よりのぼる

三原市 小白 照子

銀舍利と呼ばれしことも死語となり休耕田に雉が鳴くなり

三次市 岡崎 明治

虫たちも生きづらからんこの猛暑花に水撒けばバツタら寄り来

広島市 木戸 博恵

逝く義母の珊瑚の念珠継ぐ孫よヒロシマ想う縁とぞせん

広島市 末田 敦子

見えぬ目で撫でつつ進む探し物当たりて握る夫の手強く

広島市 石原千代子

幾万の時計の針をとめたろう広島がヒロシマになった日

尾道市 久保 ヒデ

「まちんと」を心ひとつに唱いたり原子爆弾使わぬ世界を

庄原市 安川 博子

真つ新の麦わら帽子買い揃え孫の声待ち夏ふとん干す

尾道市 砂田 達成

夏休み子らの声無き公園に我れ一人居てセミの声聴く

広島市 村尾 和

戦争の終りはいつとヒロシマで「平和のポスト」に問う十二歳

廿日市市 金子貴佐子

苔寺のみどりの苔に娑羅の花一日花落つ大き白花

広島市 山本 憲治

遠き日に君と歩みし野の道に吾亦紅咲くかすかにゆれて

福山市 林 スミ子

路地裏に藁の匂ひの蘇る被爆に耐へし人家を解けば

広島市 永井 勝弘

役者絵の写楽の眼まなこのひとにらみ外国人とらくにびとに媚は売らぬと

広島市 岩本 幸久

子ら歌ふ「ひろしま平和の歌」聞こゆ今朝全開の校舎の窓より

広島市 大多和 義

不揃いの足で踏ん張る茄子の牛魂棚の上出番待つがに

三次市 林 勝子

「を」の一字置き替えながら詠まんとす傘寿くる身に湧くときめきを

呉市 河崎 典子